

二〇二五年度

二月二日午後入試

国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、
4ー1 から 4ー11 まであります。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。)

古代中国の思想家である孔子は多くの弟子を持ち、教えを説いていた。孔子の弟子の一人に宰予という人物がいた。

昼寝をしていた宰予は、いい気持ちになって目をさました。あたりはしんとしている。彼は大きく背伸びして、あくびを一つすると、のろのろと寝台を下りた。それから椅子に腰かけて卓に頬杖をつきながら、

A 窓の外を眺めた。

中庭の石畳には、もう日がかげっている。雀が二、三羽、急にそこから飛び立って、屋根に止まった。屋根瓦の頂上が黄色い夕日の光を反射している。その光の中に、雀が点々と真っ黒にならんだ。

少し寝過ぎたかな、と彼は思った。①そして少し緊張した顔になって耳を澄ました。

遠くの部屋から、かすかに話し声が聞こえてくる。

(やはり寝過ぎたのだ。)

そう思って彼は少しうろたえた。そして椅子から立ち上がると、そそくさと部屋を出ようとした。しかし、彼は戸口の所まで行くと、急に立ち止まって、目を床に落とした。

(なにか口実がないとぐあいが悪い。)

それからしばらく、彼は足音をたてないように、そろそろと室内を歩き回った。②歩きながら、何度も首をふったり、うなずいたりした。そして、ふたたび卓のところに戻って、着物の袖でしきりに目をこすっていたが、それが終わると、すました顔をして部屋を出て行った。

廊下を伝って、みんなの集まっている部屋の前まで行くと、彼はもう一度立ち止まって耳を澄ました。中ではもうかなり話はずんでいる。孔子の声もはっきり聞きとれる。彼はまた、しきりに首をふった。が、とうとう思いきって戸をあけた。

話し声がぴたりと止まって、みんなの視線がいつせいに彼に注がれた。③彼は、足の下から床が地の底に落ちていくような気がして、膝ががくがくした。しかし、ともかくも孔子の前まで行って、つとめて平気を装いながら、おじぎをした。

孔子はちよつと彼の方に視線を向けた。彼はその機をとらえてなにかいおうとしたが、うまく口がすべらなくて、苦しそうにつばをのんだ。

「そこで……。」

と孔子はすぐみんなの方を向いて話し出した。

④「いっしょに学ぶことのできる人はあっても、いっしょに道に精進することのできる人は少ないものじゃ。」宰予は自分のことをいわれているような気がして、棒立ちになったまま動かなかった。孔子の言葉はなだらかにつづいた。

「また、いっしょに精進することのできる人はあっても、いざという時に微動だもしない信念に立って、行動をともしうる人はまれなのじゃ。」

宰予は、これは自分のことに限ったことではないらしいと思って、少し気がゆるんだ。しかし、すぐそのまま自分の席につくのも変な気がして、まだ立ったままでいた。

「けれども……。」

と、孔子は少し体を乗り出して、

「そこまでは、いわば人間進歩の型じゃ。どれほど信念が堅固でも、それが型である間はまだ窮屈じゃ。ほんとうに事をともにするには足りない。型を脱却し、千変万化する現実の事態に即応して、自由に誤りなく生きうる人であって、はじめて事をともにすることができるのじゃ。だが、そのような人は、めったにあるものではない。」

⑤ 宰予は、おそろしくむずかしい話のように思ったが、一方、臨機応変の才ならば、自分もめったに人に負けないぞ、といったような氣もした。とにかく彼は氣がすっかり楽になって、自分の席に着こうとした。

話をやめて、彼の様子を見守っていた孔子は、彼がまさに席に着こうとする瞬間に、
「宰予！」

と呼んだ。その声は、あまり高くはなかったが、宰予の胸をどきりとさした。

⑥ 宰予は、曲げかけた膝を伸ばして、また棒立ちになった。

「お前にはまったく用のない話じゃ、あちらで休んでいたらいいだろう。」

みんながいつせいに孔子を見た。それから視線はしだいに宰予の顔に集まった。宰予は、音のしない嵐の中で、体がくるくると舞っているような氣がした。しかし、意識だけは、まだはつきりしていた。彼は早口にいい出した。

「遅刻いたしましたあいすみません。しかし……。」

「しかし？」

と、孔子が鸚鵡返しにいった。⑦ 宰予は二の句をつぐのに、ちよつとたじろいだ。孔子はたたみかけて、

「もし昼寝の言い訳ならば、よした方がいい。それは過ちの上塗りをするばかりじゃ。」

宰予はすっかり狼狽した。しかし、そうすると、ますますなんとかいわないではおれないのが彼の性だった。

⑧ 「実は……。」

すると孔子の顔はみるみる朱を注いだ。

「宰予！」

と、彼は宰予だけでなく、みんなの者に思わず頭を垂れさせたほど、悲痛な声で叫んだ。

「お前は過ちを三重にも四重にも犯そうというのか。⑨ それではお前はもう雨ざらしの材木か、ぼろ土で固めた塀も同然じゃ。雨ざらしの材木には彫刻はできぬ。ぼろ土の塀は、いくら上塗りをしても、中から崩れるばかりじゃ。」

そういつて孔子は宰予から目を放した。

それから急に声を落として、
「つい大きな声を出して、みんなにはすまなかった。もうなにもいうまい。宰予を責めてもかいのないことじゃ。」

宰予は、ふらふらとなるのを、精いっぱいこらえて立っていた。しばらくはだれひとり口をきく者がなかった。うす暗くなっていく部屋に、暑苦しい空氣がいっぱいこもって、みんなはしんとして汗ばんでいた。

「宰予はしばらく一人でよく考えてみるがいい。」

孔子のやさしい声が沈黙を破った。しかし、みんなはまだ緊張をつづけていた。その中を、宰予はたくさん目の目に見送られながら、悄然として部屋を出た。

宰予の足音が消えると、孔子はいかにも寂しそうに目を伏せながらいった。

「これまで、わしは、みんなめいめいに口でいうとおりに実行しているものとはかり信じていたものじゃ。しかし、もうこれからは、そうはいかない。いう事と行う事が一致しているか、はつきりと突きとめないで、安心ができなくなってしまう。宰予のようなこともあるのでな……しかし人を疑うのは寂しい気がするものじゃ。」

門人たちは首を垂れたまま、身じろぎもしなかった。

「いつもいうことじゃが過つて改むるに躊躇してはならぬ。過ちはだれにもある。それは一時のことじゃ。しかし、過つて改めなければこそ救いたい過ちで、生涯を過り通すことになってしまふ。また、一口に過ちといっても、それには小人の過ちもあれば、君子の過ちもある。過ちしだいでは、それによってその人に仁のきざしがあるのを知ることできるのじゃ。しかし何をいつても、口先で人をいいくるめようとする心だけはよろしくない。そんなことを許しておけば、第一人間同士の生活に信がなくなる。信は人と人とを結ぶたいせつな楔で、たとえていえば、牛車の輓や馬車の輓のようなものじゃ。輓や輓を取り去れば、車は牛馬から離れて一步も動かぬ。世の中もそのとおりじゃ。信がなくてはどうにもならぬ。だから、ほかの過ちはとにかくとして、かりそめにも口先のごまかしだけは、お互いに慎みたいものじゃ。」

孔子は諄々として説いていった。説き終わって、しばらくじつと目を閉じていたが、ふとなにか思い当たったように、目を開いて、

「しかし、悪いのは宰予だけではない。今はどちらを向いても口先だけで生きようとする人ばかりじゃ。虚心に自分の過失を見つめて、まじめに自分を責める者はほとんどないといつてもいい。それを思うと世の中は真つ暗じゃ。しかし、考えてみると、そんな世の中であればこそ、おたがいにますます精進する必要もある。いい機会じゃ。みんなも反省するがいい。自分に教えてくれる者は、必ずしも善い人ばかりとは限らぬからな。三人行えばわが師ありじゃ。善い人を見たら見習えばいいし、悪い人を見たら、自ら省みればいい。宰予もその意味ではみんなの先生じゃ。憎んではならぬ。さげすんでもならぬ。ただめいめいに自分を省みさえすればそれでいいのじゃ。」

そういつて、孔子は座を立った。

その夜、孔子の部屋では、孔子と宰予とが二人きりで対座して、長いこと話していた。孔子は、昼間他の門人たちにいったことや、そのほかいろいろの言葉をもって宰予を戒めた。その中には、

「人間というものは、正直でなければ生きられない。それが常理である。不正直で生きているものもあるが、それは幸いにして免れているに過ぎない。」

とか、

「真の君子になりたければ、口は唾同様でもかまわぬから、ただ身をもって行え。」

とか、

「学は自分のためにするので、他人のためにするのではない。古の学者は、よくこの道理を心得ていたものじゃが、今の学者は、人に見せるための学問をしたがつていけない。」

とか、というような意味のことがあった。

宰予はむろん、唯々として孔子の話を聞いた。しかし、まだどうしても心からしみじみとした気持ちになれなかった。彼には、

(不幸にして自分は昼寝を見つかったのだ。)

という気があった。

(沈黙^{ちんもく}していたんでは、世間は容易に自分を買ってくれない。という考えもあった。また、

(学問は自分のためだといっても、結局、世間を相手にしなくては、意味のないことだ。)

といったような理屈^{りくつ}も、心の中でこねてみた。

宰予^{さいよ}の不徹底^{ふてつてい}さが、孔子^{こうし}の目に映じないわけはなかった。孔子は、前途^{※ぜんと}遼遠^{りようえん}だ、という感じを抱きながら、最後にいった。

「人の心というものは、天意^{※てんい}に叶^{かな}わないうちは、のびやかな気分にはなれないものじゃ。おそらく、今のままでは、お前は永久に心が落ちつくまい。……しかし今夜はもうおそい、帰ってお休み。」

宰予は解放された喜びで立ち上がった。^⑬しかし彼の心^{かれ}の底には、きわめてかすかではあったが、まだ経験したことのない、変な寂しさが芽を吹き出して、いくぶんかでも、彼の心をまじめにしていた。

(下村湖^{しもむらこじん}人「宰予の昼寝」『論語物語』より)

※(注)

惘然^{しやうぜん} しょんぼりと元気の無い様子。

小人^{しょうじん} 心のせまい人物。

君子^{くんし} 学識、人格ともにすぐれた人物。

仁 孔子の考える道徳の根本原理である思いやりの心。

牛車の輓^{げい}や馬車の輓^{げつ} 車と牛や馬をつなぐ部品。

諄々^{じゆんじゆん} 理解しやすいように丁寧にくり返して説くさま。

咄^{わし} 言葉を発することができないこと。現代では差別的な表現とされ、使用はひかえられています。

唯々^{いゝい} 逆らわず、人の言うままに従うさま。

前途遼遠 行く先がはるかに遠いさま。

天意 自然の道理。

問一 文中の A にあてはまる語として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア じろじろと イ ぼんやりと ウ きよろきよろと エ こっそりと

問二 ——— 線① 「そして少し緊張した顔になって耳を澄ました。」とありますが、この時の宰予の様子として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 昼寝をしている間に勉強会が始まってしまったので、早く準備をしなければならぬとあせっている。

イ 昼寝から目を覚ましたところ、すでに夕方になっていてどうしてよいかわからず、途方に暮れている。

ウ 勉強会が始まる時間になったので、昼寝をしていたことでゆるんだ気持ちを引きしめようとしている。

エ 夕方まで昼寝をしていたことで、勉強会がすでに始まってしまっているのではないかと心配している。

問三 ——— 線② 「歩きながら、何度も首をふったり、うなずいたりした。」とありますが、宰予は「何度も首をふったり、うなずいたりし」ながら何をしているのですか。二十字前後で説明しなさい。

問四 ——— 線③ 「彼は、足の下から床が地の底に落ちていくような気がして、膝がぐくぐくした。」とありますが、「足の下から床が地の底に落ちていくような気がして、膝がぐくぐくした」のはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア だれにも見つかからないようにこっそりと部屋に入ったのに、みんなに見つかってしまって慌てふためいたから。

イ 自分が入室したことで講義が中断してしまい、どのように謝罪すればよいかすぐにわからずあせってしまったから。

ウ 何とかやりすごせると思って部屋に入ったところ、人々の注目がいつせいに自分に集まってしまったので動揺したから。

エ 時間に遅れても叱られることはない和高をくくって部屋に入ったが、孔子に視線を向けられて恐くなったから。

問五 — 線④「宰^{さい}予は自分のことをいわれているような気がして、棒立ちになったまま動かなかった。」とありますが、この時の宰^{さい}予の心情として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 「いっしよに道に精進^{しやうじん}することのできる人は少ない」という孔子^{こうし}の言葉が、遅刻^{ちこく}をした自分のことを非難しているものだと思われ、気まずく感じている。

イ 「いっしよに道に精進することのできる人は少ない」という孔子の言葉が、遅刻をしてしまった自分にもあてはまるのかどうかわからずになんでいる。

ウ 「いっしよに道に精進することのできる人は少ない」という孔子の言葉が、勉強会の邪魔^{じゃま}をしてしまった自分のことを責めているのだと思って反省している。

エ 「いっしよに道に精進することのできる人は少ない」という孔子の言葉が、遅刻しても勉強会にやってきた自分への励^{はげ}ましの言葉だと思って感激している。

問六 — 線⑤「宰予は、おそろしくむずかしい話のように思ったが、一方、臨機^{りんき}応変^{おうへん}の才ならば、自分もめったに人に負けないぞ、といったような気もした。」について、宰予は孔子の言葉を聞いて「臨機応変の才ならば、自分もめったに人に負けないぞ」と思っていますが、宰予はどのような才能を「臨機応変の才」だと考えていますか。解答^{かいだ}さんの「する才能。」につながるように文中から十五字以内でぬき出し、初めと終わりの二字をそれぞれ答えなさい。

問七 — 線⑥「宰予は、曲げかけた膝^{ひざ}を伸ばして、また棒立ちになった。」とありますが、「宰予」が「また棒立ちになった」のはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 孔子の話を聞いて自分は孔子が弟子たちに求める能力を持っているので、今回の遅刻について叱られることはないだろうと安心して席に着こうとしたときに、孔子から強い調子で名前を呼ばれておどろいたから。

イ 孔子の話は自分のことを非難しているものであり、今後は孔子の教えを受けることができなくなってしまうのではないかと落ちこんでいたときに、孔子から思いがけず名前を呼ばれてうれしく思ったから。

ウ 孔子の話は難しいとはいえ自分を叱っているものではなく、自分の遅刻についても何とも思っていないようにだと思ってほっとしたときに、孔子から大声で名前を呼ばれて理由がわからず奇妙^{きみょう}に思ったから。

エ 孔子の話を聞いて遅刻したことに対する弁解の言葉を求められているのだということに気づき、孔子が許してくれそうな言葉をあれこれと考えていた時に、突然^{とつぜん}名前を呼ばれてあせってしまったから。

問八——線⑦「宰^{さい}予は二の句をつぐのに、ちょっとたじろいだ。」とありますが、「二の句をつぐ」の意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア うまく言い訳をする
- イ 同じ言葉をくり返す
- ウ きびしい反論をする
- エ 次の言葉を発する

問九——線⑧「すると孔子^{こうし}の顔はみるみる朱^{しゅ}を注^{そそ}いだ。」とありますが、「朱を注いだ」とは孔子のどのような様子を表していますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 怒^{いか}りがこみ上げ興奮している様子。
- イ はずかしくて照れている様子。
- ウ おどろいてあきれかえっている様子。
- エ 悲しくて落ちこんでいる様子。

問十——線⑨「それではお前はもう雨ざらしの材木か、ぼろ土で固めた堀^{へい}も同然^{どうぜん}じゃ。雨ざらしの材木には彫^{ちやうこく}刻はできぬ。ぼろ土の堀は、いくら上^{うわ}塗り^{ぬり}をしても、中から崩^{くず}れるばかりじゃ。」とありますが、孔子はどういうことを説いているのですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 雨ざらしの材木やぼろ土で固めた堀のように悪くなってしまったものであっても、使い方によっては役立てることができるのに、宰予のように怠^{なま}けてしまう者には難しいことをやりとげることができないということ。

イ 雨ざらしの材木やぼろ土で固めた堀のような性質のよくない素材に手を加えても、しっかりしたものを作ることができないように、今の宰予のようにいい加減な心構えの者には教えを説いてもむだだということ。

ウ 雨ざらしの材木やぼろ土で固めた堀のように何の役にも立ちそうにないものは、だれも利用しようとしないと同じで、今日の宰予のように時間を守れない者は人から信用してもらうことはできないということ。

エ 雨ざらしの材木やぼろ土で固めた堀のようなものでも、環^{かん}境^{きやう}を変えることで有用なものとして生まれ変わることができるのに、宰予のように平気でうそをついてしまう者はどこに行っても変わらないということ。

問十一——線⑩「孔子はいかにも寂^{さび}しそうに目を伏^ふせながらいった。」とありますが、孔子はどのようなことに対して寂しさを感じていますか。解答^{かいだ}さんの「こと。」につながるように文中から四字でぬき出して答えなさい。

問十三 — 線⑪「だから、ほかの過ちあやまはとにかくとして、かりそめにも口先のごまかしだけは、お互いたがに慎つつしみたいものじゃ。」とありますが、これについて、次の1・2の問いに答えなさい。

1 本文から読み取れる「過ち」についての孔子こうしの考えとして最も適当なものを次のア・エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 過ちを犯おかしたときにはすぐに弁解をするようにしなければならぬ。
- イ どのような過ちでも一度過ちを犯してしまうと取り返しがつかない。
- ウ 過ちはだれにでもあるが過ちをそのままにすることこそが過ちである。
- エ 人間は過ちをくり返すことですぐれた人物に成長することができぬ。

2 「だから、ほかの過ちはとにかくとして、かりそめにも口先のごまかしだけは、お互いに慎みたものじゃ。」とありますが、孔子は「口先のごまかし」をそのままにしておくとうなると考えていますか。解答らんの「と考えている。」につながるように二十字以上三十五字以内で説明しなさい。

問十三 — 線⑫「そんな世の中であればこそ、おたがいにもますます精進しやうじんする必要がある。」とありますが、「そんな世の中」とはどのような「世の中」のことですか。解答らんの「世の中。」につながるように文中の言葉を使って五十字以内で答えなさい。

問十四 — 線⑬「しかし彼の心の底には、きわめてかすかではあったが、まだ経験したことのない、変な寂さびしさが芽を吹ふき出して、いくぶんかでも、彼の心をまじめにしていた。」とありますが、宰さい予よに生じた「変な寂しさ」とはどのような寂しさであると考えられますか。次のア・オの中から適当なものを二つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 遅刻ちこくした自分に非があると認めて必死に考えた弁解を聞いてもらうことができず、孔子から一方的に遅刻したことや人間としての心構えを叱しかられた寂しさ。
- イ 人間はだれでも良い点と悪い点があるからこそ自分の良い点をのばそうと努力しているのに、孔子からは努力も才能もまったく認めてもらえない寂しさ。
- ウ 孔子の言葉に対して自分勝手な理屈りくつをこねて教えを實踐じっせんしようとしないう心の中を見ぬかれ、孔子から深い信頼しんらいを得られずに成長を見限られつつある寂しさ。
- エ 孔子に自身の考えや才能を認めてもらおうと考えをめぐらせているのに、孔子から相手にしてもらえそうにないため自分の思いを言葉にできない寂しさ。
- オ 孔子の教えについて頭では理解していながらも、心から納得なっとくして素直に受け入れることができない自分という人間の持つている弱い心のあり方に対する寂しさ。

本文の出典である『論語物語』は古代中国の人物である孔子の言行をまとめた『論語』という古典の中のエピソードをもとに、物語として再構成したものです。本文の中にも『論語』に登場する孔子の様々な言葉をもとにした部分がありますが、本文で取り上げられていない『論語』の中の言葉はどれですか。次のア～カの中から適当なものを二つ選び、その記号を答えなさい。なお、ア～カの『論語』本文と現代語訳は金谷治訳注『論語』（岩波文庫、一九九九年）によっています。

ア 子の曰わく、与に共に学ぶべし、未だ与に道に適くべからず。与に道に適くべし、未だ与に立つべからず。与に立つべし、未だ与に權るべからず。

(訳) 先生がいわれた、「ともに並んで学ぶことができる人でも、ともに道には進めない。ともに道に進めても、ともに「そこにしっかりと」立つことはできない。ともに立つことはできても、ともに「ものごとをほどよく」取りはからうことはできない。」

イ 子の曰わく、君子は人の美を成す。人の悪を成さず。小人は是れに反す。

(訳) 先生がいわれた、「君子は他人の美点を「あらわしすめて」成しとげさせ、他人の悪い点は成り立たぬようにするが、小人はその反対だ。」

ウ 子の曰わく、我れ三人行なえば必ず我が師を得。其の善き者を択びてこれに従う。其の善からざる者にしてこれを改む。

(訳) 先生がいわれた、「わたくしは三人で行動したら、きつとそこに自分の師を見つける。善い人を選んでそれに見ならい、善くない人にはその善くないことを「わが身について」直すからだ。」

エ 子の曰わく、人の生くるは直し。これを罔いて生くるは、幸にして免るるなり。

(訳) 先生がいわれた、「人が生きているのはまっすぐだからだ。それをゆがめて生きているのは、まぐれで助かっているだけだ。」

オ 子の曰わく、君子は坦かに蕩蕩たり。小人は長えに戚戚たり。

(訳) 先生がいわれた、「君子は平安でのびのびしているが、小人はいつでもくよくよしている。」

カ 子の曰わく、学んで思わざれば則ち罔し。思うて学ばざれば則ち殆うし。

(訳) 先生がいわれた、「学んでも考えなければ、「ものごとは」はっきりしない。考えても学ばなければ、「独断におちいって」危険である。」

二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① タイマイをはたいて文学全集を買う。
- ② 高名な先生に会えたことをコウエイに思う。
- ③ 問題の解決方法をティアンする。
- ④ 新たな問題がハセイする。
- ⑤ 学芸会で主役をツトめることになった。

問二 次の①～④の――線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① コートを羽織って外出する。
- ② やりくりして路銀を作り出す。
- ③ 合格の朗報が入る。
- ④ 計画を成功へと導く。

問三 次の①～④の漢字の組み合わせはもとも四字の言葉が省略されたものです。例にならって後にあげたもとの四字の言葉の――にあてはまる漢字一字をそれぞれ答えなさい。

例 入 試 入 学 試験

① 特 急 特 急 行

② 電 車 電 客 車

③ 国 連 国 連 合

④ 行 革 行 改 革

問四

次の①～④は中国語のことわざを日本語にしたものです。似たような意味で使われる日本のことわざとして最も適当なものをそれぞれ後のア～コの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ① にわとりは逃^にげ、たまごは割^われる。
- ② 牛^{うし}に対して琴^{こと}を弾^ひく。
- ③ ラクダはやせ細^こって死^しんでも馬^{うま}より大きい。
- ④ こちらの山^{やま}から見ると、あちらの山^{やま}が高い。

- ア 腐^くっても鯛^{たい}
- イ 月^{つき}とすっぽん
- ウ 類^{るい}は友^{とも}をよぶ
- エ 馬^{うま}の耳^{みみ}に念^{ねん}仏^{ぶつ}
- オ 噂^{うわさ}をすれば影^{かげ}
- カ あぶはち取^とらず
- キ 石^{いし}の上^{うへ}にも三年^{さんねん}
- ク 雨^{あめ}降^ふって地^ち固^{かた}まる
- ケ となりの芝^{しば}生^いは青^{あお}い
- コ 好き^{すき}こそものの上^{うへ}手^てなれ

